

【暗証聖句】「エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」創世記 27 : 36

【日・ヤコブとエサウ】

イサクとリベカの双子の兄弟、兄エサウと弟ヤコブは、双子でも性格はかなり異なっていたようです。

創世記 25 章 27 節「二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人で野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。」

エサウは野原を駆ける強靱な狩人として描かれているのに対して、ヤコブは天幕の周りで働くのを常にする穏やかな人として描かれています。「穏やかな」と訳されている「タム」という言葉は、ヨブやノアにも用いられており、ヨブの場合は「無垢」と訳され、ノアは「全き（口語訳）」と訳されています。

ある時、エサウが狩りから空腹で帰ってくると、長子の特権と引き換えにヤコブが作った豆料理を食べてしまいます。エサウは長子の特権がいかに大切なものであるか、知らなかったわけではないでしょう。しかし、目の前の欲望が勝ってしまったのでした。人類のあけぼの上 P190 に次のように書かれています。

「彼らは、長子の特権を非常に重要なものと考えるように教えられていた。というのは、それが、ただ単にこの地上の富の相続だけでなく、霊的に優位が与えられることをも含んでいたからである。それを受けるものは、家族の祭司となり、その子孫からこの世界の贖い主が出るようになっていた。」

長子の特権には単に富の相続だけでなく、霊的な祝福がありました。しかし、同時にそれは責任も伴うものでした。エサウは献身を好まず、宗教生活を送る気持ちがありませんでした。それに対してヤコブは長子の特権に伴う霊的祝福に憧れ、それに加え母リベカからは、主が、長子の特権はエサウではなくヤコブに与えられると告げられたことを知らされていました。このような背景もあり、あるとき長子の特権をエサウから奪い取るように、豆料理でそそのかし、目の悪い父イサクに対しては、自分がエサウであると嘘をついて、長子の祝福を受けてしまったのでした。

【月・ヤコブのはしご】

ヤコブから巧みにそそのかされて長子の特権を奪い取られたことを知ったエサウは激怒しますが後の祭りでした。しかし、その怒りは止まず、父イサクが亡くなったらヤコブを殺そうと決心します。そのためヤコブは逃げなければならなくなりました。リベカは兄ラバンのところに行くように言います。イサクには、自分と同じように、カナンの娘からヤコブの花嫁を見つけたくないとの理由で、ヤコブがラバンのもとに行くことを説得します。このラバンのもとに逃げていく途中、ヤコブは夢の中で主に出会います。それはとても不思議な夢でした。それは天と地をつなぐはしごの夢でした。

創世記 28 章 12 節「すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた」

ヤコブは天と地をつなぐはしごを、み使いたちが上り下りしている夢を見ました。ヤコブは独りぼっちで孤独だったことでしょう。主の祝福が欲しいという純粋な思いとはいえ、父を欺いてエサウから長子の特権を奪うということをしてしまったため、神様を悲しませ、神様からも見捨てられてしまったと感じていたかもしれません。しかし、ヤコブは決して独りぼっちではありませんでした。天と地はつながっており、その天からたくさんのみ使いが遣わされ、ヤコブは自分が守られていることを知ったのでした。ところで、この天と地をつなぐはしごは、イエス様を表していると言えます。

「はしごは、交わりの仲介者として任命されたイエスを代表していた。」人類のあけぼの上 P200

イエス様は仲保者として私たちをとりなし、天の世界を垣間見せてくださいます。イエス様を通して、天の祝福が降り注いできます。そして、イエス様を通して天国に入っていきます。まさにイエス様は天と地をつなぐはしごなのです。ヤコブは夢を見せられた場所をベテルと呼びました。それは「神の家」という意味でした。バベルの塔を造った人々は、自分たちの力で天に届こうとしました。バベルの塔はいわば神にたどり着こうとする人間の努力を表しています。それに対してベテルのはしごは、神のもとに行くのは、神ご自身が私たちのところに降りてきてくださることによってのみ可能となることを教えています。

## 【火・欺く者が欺かれる】

ヤコブは旅を続け、ある井戸のところまでやってきます。そこでラバンの娘で、ヤコブの妻となるラケルと出会います。ヤコブはラケルを妻にすることを望み、ラバンの家で無報酬で7年間働くこととなります。ヤコブはラケルのために7年間働きましたが、彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われました。ところが7年後、ラバンがヤコブに与えたのはラケルの姉のレアでした。ラバンの言い分は、姉よりも先に妹を嫁がせることはしないからというものでした。一週間後、ラケルも妻として与えられることとなりますが、もう7年間働くように要求されます。ラバンはヤコブを働き手として失いたくなかったのでしょうか。しかし、ヤコブからすれば欺かれたと感じたことでしょうか。なぜ、このようなことを主は許されたのでしょうか。考えてみれば、ヤコブも同様に父イサクを欺いたのです。欺く者が欺かれる。欺かれることの辛さを、ヤコブ自身が知らされたのです。欺きに正当な理由はないのです。ヤコブは祝福の基として、イスラエルとなるためには、まず自分自身の罪に気づき、悔い改める必要があったのです。

## 【水・家族の祝福】

ヤコブの最初の7年間は短く感じましたが、次の7年間は長く感じたかもしれません。しかし、この7年の間に、ヤコブは12人の息子のうちの11人の息子を授かります。その際、神様が「胎を開かれた」と表現され、ヤコブの子どもの出産が神様の奇跡の結果であることを表しています。

レアの4人の子供を見てみましょう。最初の子どもラバンは、「顧みる」という意味の名前です。これはヤコブが妹のラケルばかりを愛するために寂しい思いをしていたレアを、主が顧みて、先に子どもを与えてくださったということが表されています。2番目のシメオンは、「聞かれる」という意味がありますが、これもヤコブから疎んじられているという訴えに主が耳を傾けて聞いてくださったという思いが込められています。3番目のレビは「結びつく」という意味があり、夫が自分に結びついてほしいという思いが込められています。そして、4人目のユダは「ほめたたえる」という意味があり、もう嘆いていないレアの姿が目に見えます。レアに4人もの息子が与えられる中で、ラケルには一人も子どもが与えられません。しかし、結婚から7年目について息子が与えられます。

## 創世記 30 章 22 節「しかし、神はラケルも御心に留め、彼女の願いを聞き入れその胎を開かれた」

やっと授けられた息子がヨセフでした。ヨセフは11番目の息子でしたが、祝福を受け継ぐこととなります。また、ラバンの家を離れたあと、ラケルにはもう一人の息子ベニヤミンが与えられます。しかし、難産となり、ラケルはベニヤミンの出産が原因で死亡してしまいます。

## 【木・ヤコブ・ハランを去る】

ヤコブは忍耐をもって姑のラバンに仕えてきました。もともとは妻を見つけるための旅であり、これほど長く滞在することになるとは思ってもみなかったことでしょうか。もし、エサウを恐れていなければ、もっと早く家に帰っていたことでしょうか。しかし、転機が訪れます。それはヨセフが生まれたことでした。ヨセフが生まれたとき、ヤコブはラバンのもとを離れて父の家に帰り、自分の家を持ちたいと強く思うようになっていくのです。そして、この思いを後押しするように、主が夢に現れて次のように語るのです。

## 創世記 31 章 13 節「わたしはベテルの神である。かつてあなたは、そこに記念碑を立てて油を注ぎ、わたしに誓願を立てたではないか。さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい。』」

主は、「私はベテルの神である」と言います。主は、ご自身をベテルで契約を交わした神であることを伝えます。その契約とは、「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（創世記 28:15）ということでした。ここで主は、「かつてあなたは、そこに記念碑を立てて油を注ぎ、わたしに誓願を立てたではないか」と、そのときのことを思い出させ、そして力強く「さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい。」と語られたのでした。長く沈黙されていたかのように思われた主から、やっと故郷に帰るように言われます。神の時がきたのでした。わたしたちも、神様が沈黙されるように思われるときでも、忍耐して神の時を待つことが大切です。